

ラムステッドと日本語研究 —1924年の論文から—

小川 誉子美

ABSTRACT

The Finnish linguist G.J. Ramstedt is well known for his pioneering role in establishing the field of Altaic comparative linguistics, as well as serving in a diplomatic capacity as the first *chargé d'affaires* at the Finnish legation in Japan from 1919 to 1929. It was during this ten-year stay in Japan that he concentrated his efforts on attempting to discover the origin of the Japanese language and published a treatise on his research in 1924.

In writing this article, I surveyed a range of topics, not only those included in Ramstedt's research findings, but also those in the similar stream of studies by his predecessors, as well as observations and evaluations of his work made by other comparative linguists.

Ramstedt's work was carried out through comparisons of the various aspects of the Altaic languages, and outlines a solid and potent methodology of establishing a possible genetic relation between Japanese and the Altaic languages.

Ramstedt's work laid strong foundations and had a promising start. Although his work was never completed and so had potential for further development and expansion, no satisfactory progress had been made in comparative study of Japanese, as he himself pointed out in his letter addressed to the Japanese linguist Shichiro Murayama.

1. 目的

ラムステッド (G.J. Ramstedt 1873-1950) については、これまで、アルタイ言語学者としての功績や、1919年より10年間、初代駐日代理公使として日本とフィンランドの友好の礎を築いたことを中心に紹介されてきた^(注1)。しかし、1938年にフィンランドではじめて日本語講座を開設したことや、ラムステッドの日本語に関する考えについては、日本語教育や日本語研究史の分野で取り上げられることはなかった。1998年、ハレーン (H. Halén) による *Biliktu Bakshi · The Knowledgeable Teacher. G.J. Ramstedt's Career as a Scholar* が出版され、学者及び、外交官としての側面を中心にラムステッドの生涯について詳細が明らかにされたが、ここでもラムステッドの日本語講座での講義内容等については触れられていない。また、ラムステッドは相当数の論文や著作を発表したが、日本語について述べた論文は数が少ない^(注2)。その希少な論文の一つは、日本語の系統に関して考えを述べたものであり、1924年の滞日中に発表された (以下、ラムステッドの論文と呼

ぶ)。本稿では、フィンランドにおけるはじめての日本語講座の開設者及び、教授者としてのラムステッドが、日本語に対してどのような考えをもっていたのかを考察する。そのために、この論文が発表される1924年以前の日本語の系統についての議論、ラムステッドの論文の検討、及び、その後の比較言語学者たちによるラムステッドの論文への評価を概観し、その位置づけとラムステッドの日本語に対する想いを探る。

2. 1924年までの日本語比較研究

ラムステッドの論文が発表された1924年以前、日本語の系統に関する研究はどのように展開されたのか、学説史に残るものを中心に先行の研究から議論の流れをたどる。

ヨーロッパでは、19世紀から比較言語学が興隆を極め、次々と言語間の親族関係の証明がなされていった。日本語に関しても、比較言語学者の間では、主としてアルタイ系言語との関係において関心がもたれ、一部で同系説が主張された。主なものとして、ボラー (A. Boller) の「日本語がウラル・アルタイ系に属することを証明する」(1857)、プレーレ (W. Prohle) による「日本語をウラル諸語、アルタイ諸語と比較する研究」、ウインクラー (H. Winkler) の「日本人とアルタイ人」(1894)、「ウラル・アルタイ語族、フィンランド語と日本語」(1909)などがある^(注3)。国内では、藤岡勝二がアルタイ語との関連で日本語の系統について「日本語の地位」(1908)^(注4)を発表した。ドイツに留学し、ウインクラーとも交流のあった藤岡は、この論文の中で、ウラル・アルタイ語の親族関係を決定する、印欧語とは異なる言語的特徴を14項目を上げ、日本語は、母音調和の現象をのぞく13項目を満たすとした^(注5)。

朝鮮語との比較を通じて、類似がどの程度のものであるのかという視点からの議論もあった。日本語と朝鮮語の類似性には、17世紀ごろから関心がもたれ、これに着目した著作が多く発表された。アストン (G.W. Aston) は、A comparative study of the Japanese and Korean Language (1879)^(注6)を著し、音声・文法の比較をもとに、両言語の親族関係は疑う余地がないが、その程度について断言するのは難しいと述べた。大韓帝国に留学経験のある金沢庄三郎は、両言語同系説をまとめた学位論文『日韓両言語同系論』(1910)を発表した^(注7)。体系的な形態素や語尾の比較を重視し、言語構造全般にわたって比較、150の語彙及び15の文法的形態素の一致から同系を証明したとした。しかし、音韻法則を基準とした形態素の一致や共通祖語の復元による説明には成功しておらず、服部四郎は、「当時はこれによって両言語間の親族関係が証明されたと考えた人もいるが、今日から見ればその証明は成功していない」(服部1959:36)という。史学者、白鳥庫吉は、「日本書紀に見えたる韓語の解釈」(1897)^(注8)で、日本書紀に現れることばの朝鮮語による解釈を試み、両言語の類似性を明らかにしようとした。その後、1901年に渡欧し、2年間各地を歴訪、帰国してからは、日本語の比較研究の範囲を拡大し、「国語と外国語との比較研究」(1905)^(注9)を著した。その中で、ウラル・アルタイ諸言語から南洋語にいたる60余りの

言語と比較し、日本語の語源説明を試みた結果、両言語が親密な関係にあるということを正式に宣言した。しかし、1914年には、「朝鮮語と Ural Altai 語との比較研究」^(注10)において、前の宣言を覆し、朝鮮語はウラル・アルタイ語に属するということは疑いの余地がないとしつつも、両言語に類似した単語が少なく、類似していると以前指摘した単語も、その内容は証明に至るものではないと以前の宣言を撤回した。法学者、宮崎道三郎の「日韓両言語の比較研究」(1906)^(注11)、新村出の「国語系統の問題」(1911)^(注12)、小倉進平の『国語及朝鮮語のため』(1920)は、両言語の類似を認めつつ、同系か否かという問いに対しては慎重であった^(注13)。

朝鮮語との比較研究は、主に、史学者や国語学者によってすすめられ、主として語彙の比較を通じ、日本語が朝鮮語と同系であると宣言されたり、同系である蓋然性の高いことが指摘された。尚、この当時、朝鮮語研究及び、日本語との比較研究が興隆をきわめた背景については、近年、学問と国家政策の関係という視点から議論されている^(注14)。

琉球語に関しては、19世紀から西欧の宣教師らにより、語彙の比較を中心に考察がすすめられていた。中でも、さまざまな日本の事物研究に功績を残したチェンバレン (B. H. Chamberlain 1850-1939) は、東京帝国大学博言科を1890年に退職した後、琉球研究に着手、1893年からは主に言語に関する論文をまとめはじめ、1895年には、日本アジア協会での *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, TASJ Vol. 23* を、続いて、*A comparison of the Japanese and Luchu language, TASJ Vol. 23* を発表し、琉球語研究の金字塔を打ち立てた。これらの論文では、琉球語の所属系統、文法、音韻、語彙など詳細な記述を行ない、比較言語学的手法によって琉球語と日本語の親族関係を明らかにし、日本語と琉球語をアルタイ系の言語であろうと推測した。

3. ラムステッドの論文の概要

ラムステッドは、日本語の系統についての見解を、*A Comparison of the Altaic Languages with Japanese* 「アルタイ諸語と日本語の比較」として、1924年に日本アジア協会の会報 *Transactions of Asiatic Society of Japan the 2nd series* で発表した。この中の学問的意義のある提案については、1950年以降、比較言語学者によってしばしば引用されているが、本節ではそれ以外の部分も含めラムステッドの主張を紹介する。

従来の研究と異なり、日本語の比較の対象を、ウラル・アルタイ諸語とせず、アルタイ諸語に絞った。注目すべき点は、原始日本語に子音で終わる音節があった可能性を示したことである。例えば、kata (片、方) という単語は、ツングース語の kalta, モンゴル語の kaltasun, 朝鮮語の kolta など対応する例をあげ、原始日本語では、karta, kasta, kamta と再構される可能性があるとした。つまり、ka という音節は kak, kag, kai, kar, kal のような閉音節であった可能性を示したのである。日本語が開音節であることは、閉音節を基本とするアルタイ語説をはばむものであったが、閉音節であった可能性を提示することに

よって、日本語をアルタイ語説に一步近づけることができたと言える。

また、古代日本語では、語頭に k-, t-, p- は立ちうるが、 g-, d-, b- は立ちえないとされてきた。しかし、アルタイ語説から見れば、原始日本語で、g-, d-, b- も存在し得たはずであり、後に、g- は k- に、d- は j- に、b- は弱まって w- に変化した可能性もあると述べた。つまり、原始日本語で語頭に有声音が立った可能性を示すことにより、語頭音に有声子音がくるアルタイ語との関係を示唆したのである。こうした仮説を証明する資料として、モンゴル語やツングース語、トルコ語などの多くの言語の例を用い、さらに琉球語の例を加えて原始日本語の再構を試みた。

また、アルタイ語は、語頭音に r や l は立たないとされているが、古くには語頭に立ち、これが s などに変化していったという。sake (酒) もアルタイ語説から見ると、アジアで最古から知られている蒸留酒、raki や rak (アラビア語では araq, トルコ語では aracy, モンゴル語では araki) を語源とし、sake の s は r から変化したものと見ることもできると述べた。

また、好奇心から生活語のみをとりだして、日本語とアルタイ諸語の単語リストを作ってみると、日本語のアルタイ語説を示唆するような、大変興味深いことが見えてくるといふ。例えば、日本語の語頭に k が立つ単語 katai, karai, kiri (限), kiri (切) は、それぞれ、トルコ語やモンゴル語などに対応するものが見出し得るし、また、kiru (着る), kuru についても、同じく見出せるが、偶然の一致である可能性も考えなければならないと述べる。こうして単語リストをもとにした比較の方法を示し、同様に、語頭に t が立つ単語リストの作成を提案する。

一方、yasui から yasumu が派生したと考えることができるのなら、これはアルタイ語的であると述べる。特に、日本語には、けさ (ki-asa)、たやすい (te-yasui)、たすける (te-sukeru) など、古くは接辞を含む複合語であったものが多く、例えば、yane, mine, takane の ne, noboru, noru, の no など、もはや接辞であると認識されずに使われているものもあると指摘する。動詞の名詞化語尾の a は、(nau →) nawa、(oiru, oyuru →) oya のように今でもその姿が見られるが、takai との関連が推測される takara や、saku との関連が推測される sakura の ra も、kokoro の ro と同じ接辞だと考えられるという。こうした徹底した形態素の考察なくしては、確実な比較研究はありえないと述べる。また、音節 su を含む単語の例として、su, sude, sumu, sugosu, sugiru, suzuri, sumi などあげ、意味が多様であることから、比較研究のためには、確固たる理論を構築しなければ、系統関係の証明は不可能であり、日本語はアルタイ語との関連をたやすく予測できるような類似性をほとんど残していないと指摘する。日本語は、アルタイ語からかなり早い時期に分れたと推測され、日本語からアルタイ語にたどりつくまでには、かなりの長い道程を経なければならないが、望みを捨てることはないと述べる。しかし、文法構造の類似は明らかだが、接辞については類似性の証明には程遠いと言わざるを得ないとの考えも示す。また、

言語は古を知ることのできる最良の博物館であり、隣人がだれであるのかも語ってくれるという。日本語を孤児にたとえ、孤児であっても親や親戚はいるということから日本語の系統の証明の可能性に積極的な姿勢を見せる。

若いロシア人教師、ネフスキー氏が、宮古島の言葉は日本語より琉球語により近いという印象を持っていると語ったことを紹介し^(注15)、琉球及び周辺諸島、特に台湾の山岳地方の土着の言語に何か立証できるヒントがあるのではないかとの推測から、台湾における山岳民族の言語についても研究する必要性を強調している。また、今後の研究の進め方として、台湾の土着の言語、朝鮮語、アルタイ諸語という順で行なうのが妥当だと述べる。

方言研究の重要性を指摘する一方、ラムステッドが目を通したことのある日本語の方言についての学術的な研究は、チェンバレンの琉球語研究だけであると述べている。ラムステッドは、この論文の最後で、アジア協会の会報(TASJ)に掲載されたチェンバレンの琉球語研究をはじめ、アジア協会の学問的貢献を評価し、感謝の意を表している。

以上、日本語研究に関する展望も含め、主張を概観した。学問的な特徴に関しては、次のように言えよう。

ラムステッドが行った比較研究の大きな特徴は、二つの言語の類似性の指摘から出発したのではなく、原始日本語がアルタイ語的特徴を持つ可能性を探る方法を示したことにあると言える。それは、主に音韻再構の方法と形態素の比較であった。つまり、アルタイ諸語の変遷の歴史をたどることで、日本語の音韻史を類推したとも言える。

日本語の音節構造が開音節であるということは、閉音節を基本としたアルタイ語説を妨げるものであった。また、日本語の語頭音に有声子音が立たないということも、同様に、アルタイ語説を妨げるものであったが、みごとに、この障害が除かれる可能性を示した。つまり、想定されたアルタイ基語と、原始日本語が同系であると認定するためには、原始日本語の姿をどのように解釈すればいいのかという点から出発し、日本語がアルタイ諸語と同系であるというための証明方法を提示したのである。しかし、実質的に日本語がアルタイ語に帰属するかどうかという点については、可能性は認めながら、証明はなされなかったのである。

4. ラムステッドの論文の評価と位置づけ

ラムステッドの論文は、主に1950年以降、上代日本語を根拠にアルタイ諸語との関係を明らかにしようという国語学者や言語学者らの議論の中で、注目されるようになった。

アルタイ比較言語学の正当さを日本語の資料によって証明しようとしたミラー(R. A. Miller)は、「偉大な開拓者的貢献をした」、「ボラーやプレーレをラムステッドと比較すると、直ちに、このフィンランドの言語学者のすばらしい手腕と洞察力がうかがわれる」(ミラー1981: 9)と評価した。また、従来の研究と比較し「同時期の研究の中では模範的な研究として残っている；それは全般にわたって慎重である；若干の重要な提言をしてい

る」(前掲：17)と評価した。また、韓国の比較言語学者、宋敏は、日本語と朝鮮語の主な先行研究について論じた「韓日両国語研究史」(1976)において、両言語の研究史を、草創期、方法論の模索期、比較研究の再出発期と3つの時代区分を行なった。この草創期と方法論の模索期の境を、ラムステッドの論文を發表された1924年とし、日本語の系統研究史上、画期的な論文として位置づけている。語頭音として有声子音が立ちうる可能性を示したことについて「論理的にして科学的な理論の展開のしかたはこの分野の従来の学者たちに求めることができないほど整然としたものだった」(前掲：61)と述べている。研究史において「ラムステッドの方法論は1950年代以後の比較研究になくなくてはならない礎石を準備してくれた」(前掲：69)と位置づけ、彼の功績を「具体的な比較研究にあるというより、斬新な方法論の提示にあるといえる」(前掲：60)と述べている。ツングース語と日本語の数詞の関係の親密さを論じた村山七郎は、ラムステッドを「国際的に見て、アルタイストの代表」(村山・大林1973：98)と位置づけ、従来の研究と比較し、「日本語の親縁関係を着実に解決しようとしたラムステッドの説は、今日読み返しても読みごたえがあります」(前掲：94)と述べ、特に、「比較を精密な方法でしようとした気概は大したもの」(前掲：104)と評価している。具体的には、古代日本語の語頭の有声子音についての論考、及び、音節構造についての論考に関して賛同の意を示している(前掲：96)。服部四郎や韓国のアルタイスト李基文も同様に、日本語の比較研究の道を開いた研究として位置づけている(注16)。

当時、親族関係の証明が注目されている中で發表されたラムステッドの論文は、実質的なことは述べていないという点で、結果としては新しいことは見出し得ないものであったに違いない。ミラー、服部、村山、宋ら比較言語学者は、こうした期待されていた結果の是非についてはなく、原始日本語が閉音節であった可能性を提示したこと、また、語頭に有声子音がたった可能性を提示したこと、これらを示すに当たって必要な音韻再構の方法や、いくつかの形態素や代名詞に対する比較の方法を示すなど、画期的な比較方法論を提示したという点を評価した。

5. ラムステッドの日本語研究についての想い—その後

宋(1969)は、日本語と朝鮮語の比較研究の展開の中で、ラムステッドの論文を「方法論の模索期」を切り開いたという位置づけをしているが、その後、画期的な方法論の提示はなく、日本語の系統研究は、それに続く「再検討期」も含め、大きな進展を見せなかった。日本人研究者の貢献が極めて少ないとミラーは指摘するが(前掲：24)(注17)、インド・ヨーロッパ語の系統研究から發達した比較言語学は、西欧言語の研究に役立つだけで日本語の研究にはなじまないという主張が出るなど、具体的な可能性の提示や積極的な結論からは遠のいた内容に傾いたりすることもあった。70年代に系統論ブームがおこったが、ブームから新しい研究成果がもたらされることもなく、学界の一部からは冷評を受けるこ

とになる^(注18)。こうしたその後の研究の動向をみると、このブームがおこる50年も前に、画期的な方法論を提示したラムステッドの功績はきわめて意義深いことに気づくとともに、彼がこのような日本の比較研究の向かいつつある方向にどのような想いでいたかを推測するのは難くない。

日本語の学習は、回想録をたどると、日本に向かう船の中ではじめたと記されている^(注19)。この論文が発表された1924年という時期は、初代駐日代理公使として着任して5年目のことであり、文献考証や言語調査に費やせる時間は限られていたと思われる。また、日本語による文献を駆使できるほどの日本語力を磨き上げる余裕があったとも思えない。論文で必要性を述べていた琉球諸島等における学術調査も、その後かなうことはなかった^(注20)。しかし、極めて制約された境遇であっても研究を可能ならしめたのは、長年にわたる中央アジアを中心に行った学術調査の結果、モンゴル語、トルコ語など多数のアルタイ系言語に通じ、アルタイ基語の想定をなし、そこで用いられた確固たる方法論と、それを証明する道具としての豊富な言語知識を有していたからに他ならない。

ラムステッドの業績のうち言語に関するものは、トルコ語やモンゴル語、朝鮮語に関するものが多く、Halén (1998) でまとめられたラムステッドの業績リストによると、大小合わせ、200点を優に超える。その中で日本語についての学術論文は、1924年の論文が唯一のものであり、朝鮮語との比較研究に関するものがわずかにあるという事実からみても、ラムステッドにとっては、日本語の系統研究は中心テーマではなかった。

しかし、ヘルシンキ大学を退官する直前の1938年には、フィンランドではじめての日本語講座を開講し、また、1942年には、ヘルシンキでの「日本語の歴史について」と題した講演の中でも、日本語と朝鮮語の関係について話している。その後、ラムステッドは、アルタイ学の総決算である *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft* (1952) 『アルタイ言語学概説』^(注21)において、日本語をアルタイ諸語から除外してしまった。しかし、*Studies in Korean etymology* (1949) 『朝鮮語語源研究』においては、随所に朝鮮語と日本語との比較を行っていることなどから、アルタイ比較言語学を定義するにあたり、日本語の系統については決定的な結論には至らず、結果的には除外したが、日本語をその射程に入れながら研究を進めており、晩年まで心にとどめていたものと推測される。

滞日中は、白鳥庫吉をはじめ、小倉進平、新村出らとの学問的交流もあったが^(注22)、帰国後も、長田夏樹から学問的評価を求められて学位論文を送られるなど^(注23)、日本の言語研究の動向もいくらかは把握していたと思われる。村山七郎にあてた書簡で、「自由な時間があって、いくらか若かったなら、日本・朝鮮語の研究に専念したいものです。この研究分野は未開拓です。この分野で現在の研究者たちが示している動揺的な、まちがった結果からそのことがわかります」^(注24)と述懐している。ラムステッドが提案した方法が継承発展される条件が整わない当時の状況に対する歯がゆさや、遣り残した無念さなど、晩年のラムステッドがいただいていた日本語研究に対する想いが、ここに垣間見られる。

ラムステッドは、日本の比較言語学者の間で、この功績について語られはじめた1950年に、アルタイ言語学の概説書の完成を見ぬまま、帰らぬ人となったのである。

注

1. Ramstedt (1950), Momose (1973), 小泉(1976), Embassy of Finland(1994), 桑木(1951)に述べられている。尚、来日までの代表的な業績には、*Über die Konjugation des Kharlkhmongolischen* (1903)「ハルハモーコ語の動詞変化」*Karmückische Sprachproben* (1909)「カルムイク語資料」*Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei* (1913)「北モーコの二つのウイグル文字碑文」などがある(小泉1976)。
2. 日本語についての学術論文としては唯一のものであるが、この他、日本語と朝鮮語との関係について述べた *Two words of Korean-Japanese* 金田一京助訳「朝鮮及日本の二単語に就いて」『民族』1-6(1926)などがある。服部四郎は、この小論について「両言語が同系である蓋然性の多いことに成功しておられる」(服部1959:44)と述べる。一般向けの著作も若干あり、その代表的なものに、日本滞在の回想録 *Lähettiläänä Nipponissä*, (1950)『フィンランド初代公使滞日見聞録』、晩年につづった訳詩集 *Japanilainen Runoja* (1953)『日本の詩歌』(彼の死後、日本に同伴した娘エルマによってまとめられた)がある。
3. 長田(1974)、服部(1959)による。ラムステッドはこれらを先行研究として紹介しているが、プレーレのものは目を通していないという(Ramstedt 1924:42)。
4. 『国学院雑誌』第14巻。これは、それ以前になされたアリア説に対する反駁であった。
5. 母音調和は、後に、有坂秀世らによって上代日本語に存在したことが明らかになった(服部1959:42)。その後、堀岡文吉は、この14項目はマラヨ・ポリネシア諸語にもあてはまるから、アルタイ語同系説の根拠にはなり得ないと述べた。
6. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series, Vol.11, Part II, London, (1879)*
7. 同じく三省堂から、英語版 *The Common Origin of the Japanese and Korean Languages* (Sanseido, 1910)も出版されたが、ラムステッドは1924年以前には目を通していないと思われる。
8. 「日本書紀に見えたる韓語の解釈」(1897)『史学雑誌』第8編 第4号
9. 「国語と外国語との比較」(1905)『史学雑誌』第16編 第2-9
10. 「朝鮮語と Ural-Altai 語との比較研究」(1914)『東洋学報』第4巻 第2号
11. 「日韓両言語の比較研究」(1906)『史学雑誌』第17編 第7-10号
12. 「国語系統の問題」(1911)『太陽』17巻1号

13. 『国語及朝鮮語のため』(1920) ウツボヤ書店。小倉は、当初慎重な態度だったが、後に、立場を変え、金沢と同じく同系説をとなえるようになったことが、安田(1999)で指摘されている。
14. 安田敏明(1999)、鈴木広光(1974)に詳しい。また、宋敏(1969)、李基文(1974)は、金沢(前掲)に対し、疑問を呈する。
15. ネフスキー(N. A. Nevsky 1892-1945)は、宮古島方言にみられる音声的特徴についての調査を行い、この結果を1929年に日本語で発表した。宮古島方言や琉球語の研究に対し、ラムステッドが強い関心をいただいていたことが伺える。
16. 服部四郎は、注目すべき点として、日本語とアルタイ諸語の相違点を祖語から分裂した後に生じたものと説明しようとしている点をあげる(前掲:43)。
17. ミラーは、方法論においては、村山七郎を高く評価している(前掲:24)。
18. 亀井(1971)や亀井孝・橋本萬太郎(1979)では、系統とは方言関係にすぎず、方言分裂、つまり、記録を持たない方言のあとをたどるのは容易ではない。また、系統研究で用いられる音韻法則をうちたてるための語彙の選択が恣意的であるということなど、系統論というものが成立するものかどうかと疑問を呈している。
19. Ramstedt(1950)、Halén(1998)によると、上達は目覚しく、当時は珍しかった日本語を話す学者公使として知られていたという。
20. Halén氏の私信による
21. *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft, Memoires de la Société Finno-Ougrienne*, 104 は、弟子のP. Aaltoによって、彼の死後1952年、1957年に出版された。ここでは、比較言語学的裏付けをもって、アルタイ語は、モーコ語、ツングース語、チュルク語、朝鮮語の四つの柱で支えられていることを証明した(小泉1976:101)。しかし、村山は、現段階では十分に証明されたとみるには早すぎると述べる(前掲:97)。
22. 小泉(1976)、Ramstedt(1950)、Halén(1998)による。
23. 長田からラムステッドに送られたのは、古代日本語とアルタイ語族との関係についてまとめた学位論文だったという(Halén 1998:266)。
24. 村山・大林(1973:94)。これは、1944年9月6日ヘルシンキからドイツ滞在中の村山にあてた書簡である。このとき、ラムステッドは71歳であった。

参考文献

- Embassy of Finland (1994) *75th Anniversary of Finnish-Japanese Diplomatic Relations*, Tokyo
- Halén, Harry (1985) *Japanese Studies in Finland, Japanese Studies in Europe, Directory Series VII*, The Japan Foundation, Tokyo
- Halén, Harry (1998) *Biliktu · Bakshi, The Knowledgeable Teacher. G.J. Ramstedt's Career as a Scholar, Memoires de la Societe Finno-Ougrienne 229*, Suomalais-Ugrilainen Seura Helsinki

- Menges, Karl H. (1986) Japanese and Altaic 馬淵和夫編 『日本語の起源—世界の言語学者による論集』 武蔵野書院
- Miler, Roy Andrew (1971) *Japanese and the Other Languages*, The University of Chicago Press 西田龍雄 監訳 (1981) 『日本語とアルタイ諸語』 大修館書店
- Momose, Hiroshi (1973) Japan's relations with Finland, 1919-44 as reflected by Japanese source materials, *Slavic Studies 17*, Slavic Institute of Hokkaido University
- Ramstedt, Gustuf John (1924) A Comparison of the Altaic Languages with Japanese, *Transactions of Asiatic Society of Japan the 2nd series I*, Asiatic Society of Japan
- Ramstedt, Gustuf John (1950) *Lähettiläänä Nipponissä*, WSOY Helsinki 坂井玲子訳 (1987) 『フィンランド初代公使滞日見聞録』 日本フィンランド協会
- Ramstedt, Gustuf John (1953) Japanilainen Runoja, 『日本の詩歌』 WSOY Helsinki
- 長田 夏樹 (1974) 「日本語の北方起源説」 『月刊言語』 Vol.3, No.1 大修館書店
- 亀井 孝 (1971) 「言語の歴史」 服部四郎編 『言語の系統と歴史』 岩波書店
- 亀井 孝・橋本萬太郎 (1979) 「日本語系統論の問題点 <対談>」 『言語生活』 326 筑摩書房
- 金 芳漢 (1986) 「韓国語と日本語の関係」 馬淵和夫編 『日本語の起源—世界の言語学者による論集』 武蔵野書院
- 楠家 重敏 (1986) 『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』 雄松堂
- 桑木 務 (1951) 「ラムステッド」 『学燈』 Vol.48, No.5 丸善
- 小泉 保 (1976) 「ラムステッド」 『月刊言語』 Vol.5, No.11 大修館書店
- 鈴木 広光 (1993) 「日本語系統論・方言圏論・オリエンタリズム」 『現代思想』 21(7) 青土社
- 宋 敏 (1969) 「韓日両言語比較研究史」 聖心女子大学 (韓国) 『論文集』 1 菅野裕臣・野間秀樹・浜之上幸・伊藤秀人訳 (1999) 『韓国語と日本語の間』 草風館所収
- 宋 敏 (1974) 「最近の日本語系統論について」 韓国日本学会 『日本学報』 2 菅野裕臣・野間秀樹・浜之上幸・伊藤秀人訳 (1999) 『韓国語と日本語の間』 草風館所収
- 服部 四郎 (1959) 『日本語の系統』 岩波書店
- 村山 七郎・大林太良 (1973) 『日本語の起源』 弘文堂
- 安田 敏明 (1999) 『「言語」の構築』 三元社
- 吉田 澄夫 (1972) 「チェンバレン氏の琉球語研究」 外間守善編 『沖縄文化論叢』 第5巻 平凡社
- 李 基文 (1974) 「日本語系統論によせて」 『月刊言語』 Vol.3, No.1 大修館書店

謝辞

Harry Halén 氏 (University of Helsinki) には、貴重な助言をいただきました。ここに感謝の意を記します。